

●行数の計算を間違えて詩が足りないことに気が付いた。もみじに対抗させて、春についての古い詩をひっぱり出した。日本の四季を敏感に感じさせた、四十年前のブラジルでの生活。また行くことになるか。

とよださなえ

どうだん

格差の時代とは言っても
不平等といっても
自然は公平だ
人々がどこそこの紅葉を見てきたといい
どこにも行けない私であっても
北の方から 順々に 紅葉は
私の傍にやってきてくれる
今年も見つけた
とりこわされた幼稚園跡の庭に
夕陽に映えた
とびきりの
どうだんの紅葉
私の他に
歩いている人は
何人もいるのに
なぜ
視線が
どうだんに
向いていないのか
輝いている
紅い
どうだん

もみじの季節

まっ白なさざんかの花を
かこんでいる
山吹
狂い咲きかと思うような
黄色い葉
花のような山吹の葉の色どり
今年の終りに近い

たたずまいか

十代の私は
毎年 新芽の輝きに驚き
息苦しい程 ゆさぶられる想いをした
それまで
何も感じないで
木々を通り過ぎていた
自分が何であったのかと
考えこんでしまっていた私を
心配そうに見ていた親
一本一本眺めた木や草の新緑は
いつまでも
喜びを運んでくれる
財産になった

半世紀がたってみると
私の身体が
秋の色の中に
溶けこんでいるのを知る
桜の葉、柿の葉の色どりに
目が止まり 足が止まる
十代の頃より
見知った草木は数が増えている
時々
一寸 分別くさく
その草木に
挨拶をしている自分が見える
日本という自然の中で
私自身がもみじの季節に入っていた

五月の歌

五月の歌は
果てしなく続き
くもった空の下でさえ
私は心の動きにもみくちやにされ

南の畑でも 北の山の上でも

桑の葉 銀杏の芽 楓 くぬぎも
それぞれの流儀で自分を表現し
誇り 語りかけてくる

どんな荒地にでも出てくる
ひめじおんでさえ
全く 悪びれず
ささやかな香りをもって

私は少し年をとるごとに
五月の草と多く
話あえるようになってきた

人々は訳のわからないまま
誇らしく息吹く自然に圧倒され
光の恵みを
おとなしく受け入れる
五月は人々を無意識に
自然の中に踊らせる
全く 人々は素直に踊っている
此の巧みさ！
偉大なるアジテーター
五月よ！
私は五月の心を芯まで
食べてやる

(1962・5・4)

春に向かって

バクという動物は
神様がはんば物を集めて創ったという
大層ゆかいな伝説なので
私は多摩の山の中で
快く笑いこけた
彼にもプライドがあるらしく
岩の影に入ったまま
出てこなかった

山桜の花は余り華やかでないが

芽を出しはじめた山一杯の木々は
紫にけむっていた
一つ一つの芽は
桃色に 緑に光っていた

人の通らない
すみれのこぼれ咲く山道を歩いた
ぐみの花や木苺の花に見え
心はずませた

私はこの日に感謝したい
夕暮れの強風の中で
すっかり冷たくなりながら
満開の桜の岸を駆け抜けた貴女と
大きな声で歌ううちに
忘れかけていた私を
思い出させてくれたから

(1961・4・1)

エッセイ：キューバへ

今年一月、キューバに行く機会があった。メキシコ・キューバ世界遺産の旅という名のツアーに友人達が誘ってくれた。新聞社の語学留学生として、娘がハバナ大学で学んでいたのも、同行する理由の一つであった。成田・バンクーバー・メキシコで十七時間、後日ハバナまで二時間、かなりの長旅であった。しかし、五十年來の友人と、お互いに夫を置いての飛行機の旅は、はじめてで、ゆっくり話が出来た。すぐ後の席のスペイン語を話していた若い男性達はメキシコ人で、日本での仕事が終わったので帰国するところと言う。又日本に戻るのかと尋ねると、日本にはもう仕事がないので、次は中国に行くことになるだろう、と答えた。まずは、四十年ぶりのスペイン語の口ならし。

ツアーで廻った三日間のキューバは、ホテルでも、レストランでも食物は潤沢で、夜の観光のキャバレー「トロピカーナ」のショーはラスベガス顔負け。観光客が落とすお金が貴重な財源となっているという。ヘミングウェイの家など訪ねる間、日本語の上手なスペイン系のガイドさんは、教育費と医療が国民全員無料で受けられることを強調。首に赤い布を巻いた子供達の目は、まっすぐで生き生きして見えた。以前住んだエジプトは文盲率が高く、人々の顔にはどこかうっ屈したものがあつた。文字のわかる人は、出来ない人をあからさまに馬鹿にするので、人間関係が暗くなる。同じツアー二十三名の雰囲気は、キューバ賛美に傾く。車窓に見える平地は、以前畑であつただろうが、雑草が伸びほうだい。広くもない土地なのにと、友人と二人同じことに気付いた。農作物の支払に時間がかかり、結果、離農者が増えていることを、後で知つた。犬の好きな人々は、キューバの犬はおと

なしく、素直だと話合っていた。ツアーのバスに同乗出来ない娘は、市場での一時間の自由時間に駆けつけ、キューバの犬はお腹が空いていて、無気力なんですといった。人々がいじめたりしないから、おっとりしてられる、と一押しする人。九十年代は犬も猫もキューバから姿を消したという。ソ連の崩壊で援助がなくなり、究極の食糧難だったという。その頃の動物園での一口話。『動物にえさを上げないで下さい。』次に、『動物のえさを食べないでください。』最後は『動物を食べないで下さい。』

ツアーの皆と別れ、娘のマンションに移った。普通の生活がだんだん見えてきた。コーヒーを淹れてくれた娘に、ミルク！というと、牛乳なんて買えないの！ないの！という答。日本を出る前に、欲しい物を電話で尋ねた。醤油、うどん、お茶と叫び、小麦粉、庖丁と続いた。お米はあるかと聞くとあるとの答。四十二年前キューバ革命七周年の時、アルゼンチンから夫が取材に行った。日系人へのみやげに持参したのが、お米とジレットの刃だった。

同行の友人達から沢山の日本食をいただき、娘は日本人の友人五人を夕食に招いていた。住民として買物に出ると、キューバには二種類のお金があることを知らされる。配給所で買った野菜はペソ、CUC 兌換ペソ外国人用通貨両方が使えるスーパーでの買物。牛乳は入手出来なかったが、さぬきうどん、天ぷら、海苔で巻いたおむすび等で五人を迎えられた。満腹した後、残ったものを手ぎわ良く、分けあい、持ち帰る姿は、本当に可愛らしかった。日本食がとりもつ絆か。娘は今、特派員として南米各地を飛びまわっている。